

カントにおける自然の人間化

谷 口 敬 一

I

人も知るように、十六世紀の後半、ジョルダーノ・ブルーノは、はじめて宇宙の無際限 *interminé, illimité*. を語った枢機卿ニコラウス・クザーヌスの発想¹⁾ をうけつぎ、コペルニクスの地動説を肯定するとともに、宇宙の無限性と無中心性とを積極的に主張して、アリストテレス・スコラ的な有限的宇宙像に激しい衝撃を与えた。

独自の宇宙論をもたなかったキリスト教的中世が古代からひきついてキリスト教化したアリストテレス・プトレマイオスの宇宙像は、十六世紀における天文学上の多彩な諸発見のなかで次第に成立する近代の天文学と、「無限にして特定の中心のない宇宙」というブルーノの全く新しい哲学的宇宙像²⁾ との夾撃にあって、大きく揺らぎ崩壊しはじめる。

空間的な構造が価値と完全性とのヒエラルヒーを体現する中世的古代的なこのアリストテレス・プトレマイオスの宇宙像の転覆とともに、人間の上に一つの決定的な形而上学的転位が訪れ、「秩序ある宇宙内における人間の本質的存在という近代以前の観念」の瓦壊が到来する。

自存する一切の一にして全なるものを、古代のギリシヤ人は「コスモス」と呼んだが、宇宙は、ギリシヤ人にとって、整然たる構成と恒常の秩序をもち、始めもなく終りもなく不断に存在する永遠のコスモス、ゲーテが「ファウスト」の中でコスモスを語義どおり訳したように、美と輝きに充ちた「永遠の飾り」であった。おのずから存在するものの神的な不滅の全体であるこのコスモスは、世界の外なる神によって無から創造されたものでもなければ、全体の理解を人間の自意識から始める近代自然科学の死せる機械論的自然でもない。コスモスは、みずから動き、そのすべての段階

において靈魂と精神とを付与されている、形態に富む自然的な有機体であった。そのすべての部分部分がたがいに所属しあい、かようにして一にして全なる性質を形成するような、この活きた自然的コスモスの永遠の自然的秩序は、天と地と人間と神々を支配する必然的秩序であり、それは天体の、特に太陽——その運行によって夜と昼、四季の順序が定められ、それによって一切の地上の生活が制約される——の規則的な運行においてもっともあきらかにあらわれ、無常なる人間世界に対する恒常の天界の優越を基礎づけていた。古代のギリシヤ人は、宇宙を創造した神からでもなければ、人間からでもなく、この活きた自然的コスモスから出発して、その神聖な秩序と美とを歎賞し、一切の実際的な意図や展望を越えて、ただ見るために見、知るために知ろうとする「観照」をもって、人間の最高の活動とみなしていた。疑いもなく、不滅の自然的コスモスの本質的な構造と秩序と美との、分かつことのできない一要素をなす人間は、コスモスの必然的な秩序に従い繁殖によって自己に等しきものを生み、死すべき個体として消滅するにすぎないが、しかしまたその同じ人間は、一切の存在が、その一定の特性と場所および一定の程度の完全性を有する永遠のコスモスの完全なヒエラルヒーを観照することができる。

アリストテレス的宇宙像を古代的世界から引き継いだトマスにとって、世界のうちなる一切の存在者は、まずなによりも超世界的な創造神の絶対的に自由な意志によって無から有へともたらされた被造物であった。中世のキリスト教的神学的世界は、創造主と被造物、神と世界、思寵と自然とを截然と区別して、後者を前者に絶対的に従属させ、無限という特性をただ前者にのみ付与していた。そこでは「無限」という称号はただひたすら創造神にのみ帰属し、天と地と人間とはつねに有限性のうちにとどまりながら聖書的な神学的ヒエラルヒーに貫かれている。人間は、神によってつくられたものではあっても神の唯一の似姿として、ひとしく神によってつくられた地と海、植物と動物の上位に置かれ、自然界は、ギリシヤ的な永遠の活きた自然的コスモスから墮落して非コスモス化され、神聖さを失って、人間の下位に立つ。

世界の外なる神を源泉とし、そこから発して、人間と自然とを貫徹するこのキリスト教的神学的秩序は、しかしもはや古代的ギリシヤ的な自然的秩序ではなく、人格的な創造神を原点とする神学的人間学的な秩序であり、人間と自然とを区別して自然をいやしめる、もともと反自然的な秩序だったのである。

一つの自然的コスモスを最高不変の天界と無常なる地上の世界とに分ける自然的な古代的区别は、それゆえここでは、すでにアウグスチヌスにおいて、信仰するものと不信仰なもの、永遠なる「神の国」と転変する「地の国」という神学的人間学的区別に転化する。「地の国」は、いやしむべき自然に執着し、世界を愛する異教徒の暗い闇に沈んだ無常の国であり、世界を放棄し自然に離反して、父なる神の意志を行なう信仰深いキリスト教徒のみが光り輝く永遠の「神の国」の住人となる。「この世をも、この世にあるものをも愛してはならない。誰かがこの世を愛するとき、その者には父への愛がないのである。まったくこの世にあるすべて、肉と目の喜びは、……父に発するものではなく、この世に発するものである。しかしこの世とこの世の喜びは減んでゆく。しかるに神の意志を行なう者は永遠にとどまる。」³⁾

宇宙が永遠なものであるにせよ、創造されたものであるにせよ、古代と中世の人間は、その宇宙の自然的乃至は神学的ヒエラルヒーの中に、一定の場所と地位とをまだ確保していた。そこには人がその中でくつろぐことのできる一つの秩序正しい世界があった。

無辺際宇宙の無限性に関するブルーノの思弁とともに、宇宙の絶対的な中心は消え去り、宇宙の諸部分はどこもかしこも等質で互に平等なものとなって、天と地、光と闇、精神と肉体とのあいだにかって付着していた階層的な価値の位階は、色褪せて次第に脱落する。無限なる宇宙の無中心性と等質化が、世界を不変無垢の最高の天界と転変する地上の世界とに分けるアリストテレス的な区別を全く無意味にし、コスモスをヒエラルヒー的に秩序づけられた活きた組織体とみる古代的宇宙観の全体を倒壊させる。キリスト教化され、非神聖化されて、もはや自存する不滅のコスモス

ではなくなり、世界の外なる神の有限な被造物に墮落してはいたが、永遠なる天の国と転変する地の国という神学的人間学的区別のもとに、光り輝く無垢の天界と賤しむべき無常の地上界という古代的ヒエラルヒーの残響を保存していた中世のアリストテレス・スコラの宇宙像もまたもろともに転覆する。

変化と腐敗に満ちた月下界の中心である地球の上に、輝きわたる天上界が聳え立つ中世的で古代的なアリストテレス・プトレマイオスの宇宙像の崩壊とともに、この宇宙像とともにあった古代的、自然のおよび中世的、神学的世界秩序一般もまた倒壊し、宇宙はあらゆる安定と調和を失って、単なる一つの秩序なきカオスに転落する。

かようにして、宇宙がアリストテレスの考えたように神的でも永遠でもなく、またアウグスチヌスやトマスของ考えたように無常ではあるが創造されたものであるというのでもないときにはじめて、ニーチェの「コペルニクス以来人間は中心からある x に向かって墜落しつつある」⁴⁾ という近代的運命が人間に襲いかかる。人間が宇宙の中に決定的な場所と本性とをもちやもっていないというはかなさの体験がこの運命の内容である。脈絡のないカオスの只中に、よりすぎるものもなく投げ出されているというこの人間の近代的運命の経験をはじめて適確に表現したのは、近代最初の護数家パスカルであった。見捨てられた実存、支えるもののない実存の最初のあきらかな発見を、パスカルは次のように表明する。

「わたしの生涯の短い期間がその前と後との永遠のなかに＜一日で過ぎてゆく客の思い出＞のように呑みこまれ、わたしの充たしているところばかりか、わたしの見るかぎりのところでも小さなこの空間が、わたしの知らない、そしてわたしを知らない無限に広い空間の中に投げ出されていることを考えるとき、わたしは自分がかのところになくてこのところにあるのを見て怖れ、おどろく。なぜなら、かのところになくてこのところにある、かの時になくて今あるということの理由は、なににもないからである。だれがわたしをここに置いたのか。だれの命令と指図によってこの場所と

この時がわたしにあてがわれてあるのか。』⁵⁾

注

- 1) vgl. Nicolai de Cusa DE DOCTA IGNORANTIA, ediderunt E. Hoffmann et R. Klibansky, Lipsiae, 1932. 邦訳ニコラウス・クザーヌス；知ある無知，創文社版。
- 2) vgl. De l'infinito, Universo e Mondi. G. Bruno ; Dialoghi Italiani, ed. G. Aquilecchia, Firenze, 1958. 邦訳ブルノー；無限，宇宙と諸世界について 現代思潮社版。
- 3) 「ヨハネ第一書」第二章十五節。
- 4) Nietzsche ; Der Wille zur Macht § 1. (Kröner ポケット版)
- 5) Pascal ; Pensées, no. 205. (Brunschvicg 全集版)
vgl. K. Löwith ; Existentialism in its Historical Setting
邦訳 レーヴィット；パスカル 未来社版。

Ⅱ

人間はしかし、パスカルの恐れとおどろきとによっても知られるように、宇宙の中に自己固有の地位と場所とを見失い、投げ出され見捨てられてあることに、まったく耐えがたい。してみれば、調和と安定のない暗いカオスの只中に投げ出された人間が、失われた秩序を求めてカオスを解きほぐし、そこに光と秩序をもたらそうとするのは、ほとんど必然的な成行であった。とはいえ、自然を原点とする古代的な自然的秩序と神から出発するキリスト教的な神学的人間学的秩序とがすでに倒壊して、もはや復元できないとすれば、新しい秩序は、人間自身を原点とする人間学的な秩序であるほかはない。ここからして、人間による人間のための世界秩序、非自然的で非神学的な、単に人間学的な世界秩序の設定という、壮大ではあるがあきらかに不遜な作業が開始される。そしてその際、この企てを支えるものは、皮肉にも、沈みゆくキリスト教的なあの神学的人間学的世界秩序の残照である。

創造的な意志であり精神である神と、神の唯一の似姿としてつくられた人間と、そして人間の下位に立つものとして神からもつとも離れた自然という神学的人間学的秩序のもとでは、自然的世界はもともとギリシヤ的な

活きたコスモスではなく、精神に充ちたものである必要はまったくない。いやしめられて人間の下位に置かれる聖書的自然には、なるほど光り輝く天上界と汚穢に満ちた地の世界というキリスト教化された古代的アリストテレス的な階層的秩序がまだ維持されてはいたが、しかしキリスト教の神は、決して最高の天球の原理たるアリストテレスの神ではなく、世界の外なる創造神としてすでに世界から分離しており、神の唯一無類の似姿たる人間もまた、神学的自然のうちに含まれながら、神の似姿たるのゆえに自然からぬきんでて、自然の上に立っていた。最初から超世界的な創造神と分離され、神の似姿たる人間によつても不断に離反される聖書的自然は、かくて本来的に単に物質的なものであらざるをえない。このように聖書的自然がもともと自然と精神、物質と意識との分裂への傾向を担うものであったことのうちに、近代の機械論的自然の根は存する。

それゆえ、宇宙の無限性に関するブルーノの省察が、プトレマイオス説の単なる修正にすぎなかったコペルニクスの地動説¹⁾を真に革命的な理論に仕立て上げ、無限なる宇宙の無中心性と等質性とを強調して、宇宙をヒエラルヒー的に秩序づけられた組織体とする古代的中世的な宇宙像を転覆させて以来、本来単に物質的な聖書的自然は、ルネサンスの生命的有機的自然への逆転を経てではあるが、たやすく、無限で等質の物質から成る機械論的自然に転化することができたのである。

かようにしてギリシャ哲学の活きた自然的コスモスは、聖書の創造説が独立的神的コスモスを非神聖化し、非コスモス化したことによってのみ、はじめて機械論的自然となりえたのである。

こうした自然の機械論化と並行して、聖書の創造説の自己否定的な逆説的效果は、人間の側にも同様に作用する。神学的秩序のもとで、神の唯一の似姿としてつくられ、それゆえ自然の上位に置かれた人間は、自然が神から離れ、自立して機械論的体系となるのに応じて、等しく神の手を離れ、自立して自らの理性によってのみ、この機械論的自然を理解し征服し支配する自由な個人となる。この支配する人間と支配され開発される自然との関係は、自然に対する人間の優位という聖書の秩序の非神学的改訂版にす

ぎず、自然に対する人間の優越というキリスト教的伝統は、近代に至っても依然として非神学的に維持される。むしろ、人間のための自然という聖書的伝統によってこそ、そしてそれによってのみ、自然は人間と全く縁のない異質的な機械論的自然となることができたし、人間はこれに実験という拷問を加えてその諸性質を自白させ、自然を支配してその上に君臨する自由な人間となることができたのである。もともと反自然的な神学的人間学的秩序であったキリスト教的世界秩序は、その神学的な性格を失えば、単なる人間学的世界秩序とならざるをえない。それゆえ、近代の人間学的世界秩序は、キリスト教的聖書的秩序の子、しかし親に似ない鬼子なのである。

ベルジャーエフはいう。「キリスト教の最大の貢献は、……元素的自然や精霊の力からの人間の解放である。……ただキリスト教のみが、元素的自然の循環から人間をつれ出して独立させ、その精神に自由を与えて人間の運命に新しい時代を拓いた。この時代に至って人間の運命は自由に行動する主体によって決然と生きることを開始し、人間は自由の意識をもつこととなった。

元素的自然からのこの解放の過程の別の面を、人々は深い悲しみをこめて『大いなる牧神の死』と呼ぶ。古代的世界の終焉とキリスト教世界の開始は、自然の内的生命が人間からある異質的な深みへと離れ去ったことと関係する。古代世界にあらわれて古代の自然の人間に親しかった大いなるパーンは、自然の深みへ追いやられ、人間から姿を消してしまった。救済の道に踏み入った人間と自然とのあいだには、ある一つの深淵が口を開いたのである。……キリスト教はいわば自然を殺した。これがキリスト教によってもたらされた人間精神の自由化という偉大な作業の別の面にほかならない。……

この自然の人間からの乖離、この自然の内的生命への鍵の喪失こそ、キリスト教の時代をそれ以前の時代から区別するもっとも大きな特徴である。ここからでてくる帰結は一見したところ極めて逆説的である。……なぜなら、キリスト教の時代の帰結が『自然の機械論化』だったからである。…

…人間を自由へと復帰させ、自由になじませるために、人間を自然から区別して優越させるために、キリスト教は自然を機械論化したのである。それゆえいかに逆説的にみえようとも、キリスト教のみが、実証的科学と技術を可能とした、と私は信じている。……機械論的世界観はキリスト教に反して生じたが、しかもそれは元素的自然と自然的精霊から人間を解放するキリスト教的作用の精神的結果にほかならない。』²⁾

キリスト教によって自然から離れ、近代に至って神の退場とともに神からも離れた人間は、自然からも神からも自由な存在として自立し、失われた宇宙の秩序を、自らその秩序の中心となり、源泉となることによって回復しようとする。キリスト教が世界の外なる創造神に対する人間の問題を集中して、不滅の自然的コスモスを軽んずるようになって以来、人間は神のたぐいない似姿として自然からぬきんでており、すでに有限なる世界のなかの中心であった。

「キリスト教は人間を精神的に世界構造の中心に置くことによって、自然への隷属から人間を解放した。人間中心的な存在感は古代の人間には無縁であり、古代の人間は、自己を自然の不可分の一要素とみなしていた。キリスト教のみが、人間中心的な感情を創造したのである。』³⁾

キリスト教的世界の崩壊とともに、神学的秩序の解体のなかで、しかし依然として聖書の伝統に支援されながら、人間は、神の似姿たることをやめ、自立して新しい人間学的世界秩序の中心となり、キリスト教的な神学的人間学的世界秩序から神学的性格を排除することによって生じたこの新しい人間学的世界秩序を、およそ存在する一切のものの上にあまねく布こうとする。いまや人間が宇宙の秩序の原点となり、自ら神になろうとしはじめる。

この不遜な企ての最初の明確な実行者は、近代最初の哲学者デカルトであった。

デカルトもまたパスカルとひとしく、神学的世界秩序の崩壊に直面して、新しい世界における人間の新しい場所と地位とに到達しようとし、これまで確実とされてきた一切のものを徹底的に懐疑する。

しかし、「じっさい、人間は自然の中であっていったい何者だろうか。無限に比すれば無、無に比すれば一切、無と一切との中間物、かれは両極を理解することから無限に隔たっているので、事物の始めと終りとは、かれにとって測り知れない秘密の中に手の施しようもなく匿されている。」⁴⁾と述べて、人間を神と無との間に浮遊する中間者と規定し、近代的運命の体験を固執するパスカルとは反対に、デカルトは人間を新しい世界秩序の確固不動の原点に仕立て上げようとする。

デカルトは、一切の感覚を、あらゆる既存の知識を、天と地、色と形、音と匂を、一切の外界の存在を、すべて懐疑の淵に投げ入れて、眼前に拡がる宇宙を、それゆえ彼自身の肉体を、また彼の精神のあらゆる内容を、ひとまずは消滅させる。こうした方法的懐疑の過程を通じて、純化され、上澄を移しとられ、内的な混濁から脱した自由な意識、独立した思惟する個人の自我があらわれ、あらゆる確実性の基礎、世界秩序の絶対的な始源となる。

「わたしがこのように一切を虚偽であると考えようとしていた間も、そう考えているわたしはなにものかでなければならないことに気づいた。そしてこの『わたしは考える。それゆえわたしはある。』という真理はきわめて堅固で確実だから、懐疑論者たちのどのように途方もない仮定もけっしてそれを揺り動かすことができないのをみて、わたしは、これこそ自分が探究しつつあった哲学の第一原理として、なんの懸念もなく受け容れることができる」と判断した。⁵⁾ この私、思惟する精神、自由な理性を原点として、デカルトは新しい人間学的世界秩序を構成しようとする。

デカルトはこの自由な個人の意識という原点から、暗い闇の中に沈んでいる宇宙に光をあてる。自然的な、また神学的な古い秩序の倒壊とともに、秩序のないカオスとなった宇宙に光を投げかける。この自由な理性の光のもとで、不規則に散在しているようにみえる諸物体の間の法則的關係は一義的に確定し統一されて、宇宙は因果決定性のあまねく支配する機械論的体系となる。デカルトはこの機械論的、延長的世界をもって真なる自然であると宣言し、自律する理性の使用によって「われわれは、水と火、空気

と星、天やその他のわれわれをとりまくすべての物体の力や諸作用を判然と認識し、……それらの物体をそれぞれに適合した用途にもちいることができ、こうしてわれわれは自然の主人であり所有者のようなものとなることができる。』⁶⁾ という。

かようにして、自然界のコスモス的な威力に対してもはや何の畏怖をも覚えず、発生と消滅の日常の現象、生殖や出産や死に対して何の畏敬をも知らない近代の解放された人間、自由な個人が、普遍的になった科学的な技術を用いて、作れるものは何でもつくり、自然を単に模倣するだけでなく、工夫をもって乗り超え打ち負かそうとする徹底的に人間学的な近代の世界秩序は成立しはじめる。

しかし自由な理性のみによる実体的自然の認識というデカルトの独断的な理性主義の背景には、神のたぐいない似姿として創造された人間の理性と、神の理性にもとづいて人間のために創造された自然の諸法則とは、同一の創造原理に由来するがゆえに必然的に一致するという神学的な前提が立っている。それゆえこの神学的前提とこの前提に立脚する素朴な理性主義が現実的経験の重い衝撃を受けて倒壊すると⁷⁾、カントが登場して、デカルトと同一の基盤の上に、しかしずつと堅固な世界体系を建築しはじめる。

注

- 1) J. ケプラーは、コペルニクスのことを、かれは自然よりもむしろプトレマイオスを解釈したのだ、といったが、実際コペルニクスは、天体構造の数学的単純性を原理として、地球中心説に対する太陽中心説の優位を主張したのであって、いわば、天体表の中心としての地球を太陽におきかえたにすぎず、依然として「不動の天圏」を認め、有限的宇宙観のうちにとどまっていた。ブルーノは、コペルニクスの地動説によって、伝統的宇宙像における地球中心の絶対性が、実は相対的な一臆見にすぎないことを暴露されたと考え、宇宙の無中心性、つまり無限性を強調することによってコペルニクス説を真に革命的な理論に高めた。
- 2) N. Berdiaeff ; Der Sinn der Geschichte. 1925.
邦訳 ベルジャーエフ著作集1 白水社版 138～142頁。
- 3) 同上邦訳 142頁。

- 4) Pascal ; Pensées, no. 72.
- 5) Descartes ; Discours de la Méthode. IV, A. T. VI, p. 32.
- 6) op. cit. VI, A. T. VI, p. 61~2.
- 7) もっとも、デカルトが理性主義に立脚していたといっても、この理性主義はあくまで原理的な立場をいうのであって、個々の現象の理解については、デカルトは経験の重要性を十分認識していた。

山中功一「デカルトの自然学と“expérience”」（広島大学文学部紀要第十一号）参照。

Ⅲ

およそ素材が与えられさえすれば、人間は、世界を創造した神とひとしく、独立して世界を設計し建築することができる、とカントはいう¹⁾。カントもまたデカルトと同じく、おのずから存在する自然からでもなければ、聖書的な神からでもなく、もっぱら人間の自意識から出発し、それを原点として、人間学的な世界秩序を展開する。

人間が自らの意識一般を通じて、先天的な感性ならびに悟性の純粹形式によって「自然」を組立て構成するがゆえに、人間は「自然」を普遍妥当的に認識しうるのだと、カントは考える。「われわれが自然と名づけている現象における秩序と規則正しさとは、われわれが自ら自然のなかへ持ちこんだものなのである。もしわれわれがこれを自分のなかにもっていないか、あるいはわれわれの心の自然を現象としての自然のなかへもともと入れておかなかったなら、われわれは秩序も規則正しさも自然のなかでふたたび見出すことができないだろう。こうした自然統一は現象の結合における必然的統一、いいかえれば、ア・プリオリに確実な統一でなければならないからである。……悟性自身が自然に対する立法者なのである。換言すれば悟性がなければおよそ自然なるものはまったく存在しないのである。」²⁾

デカルトが、ひとしく神の理性にもとづく人間理性と自然法則との一致という神学的前提によって独断的に糊塗した一致の問題は、ここでは解決されて発生しない。

デカルトにあっては、機械論的自然として人間学的秩序に貫徹されることとなった自然が、機械論的性格を自らの固有の本性として持つ自立的実

体として、思惟する精神に対して、まだ見かけの上の独立を保っており、この実体的自然は、ただ神によってのみ自由な精神と媒介されながら、依然として自らを自立する真なる自然と主張する。カントに至ってはじめて、自然はその自立性を失って人間の自意識に従属し、もはやおのずから存在するものの全体でもなければ、人間のために創造された自然でもなく、単なる人間の自然となる。カントの「自然」は人間に秩序を与えられることによってはじめて成立するにすぎず、人間なしにはおよそ存在しえないものだからである。かようにして、自然がその独立性を失い、「自然」の秩序が人間の立法にほかならず、自然がここでは人間に従属する人間の「自然」にすぎないのであってみれば、カントにあっては、自然法則と悟性とは当然につねに一致し、一致の問題は発生する余地がない。

そしてこの、カントにおける自然に対する悟性の立法、人間による数学的物理学的世界体系の建築、すなわち自然の自立性の明確な否認は、人間の自由な理性を原点とし、そこから発して全宇宙に人間学的秩序を布こうとするデカルト的発想の必然的な帰結なのである。人間理性と自然の諸秩序とが一致しうるための条件は、自然に原点をとって、人間を自然の本質的な一要素として自然に包含するか、あるいは、世界の外なる創造神が同一の神的理性にもとづいて人間と自然を創造するか、それとも人間を世界秩序の始源として、自然を人間に従属させるかのいずれかである。それゆえ、人間学的な機械論的秩序に色濃く染め出されながら、しかも独立の実体たる自然というデカルトの二元論的幻想は、ただ超世界的な創造神の理性にもとづいて創造された人間の理性と自然諸法則の一致という神学的前提によってのみ支えられているにすぎず、この神学的前提の転覆とともに、自然がその自立性を失って人間に従属するのはまったく当然の成行だったのである。

デカルト的自然の自立性を支えた古い神学的前提の崩壊によって、しかし依然として、人間のためにある自然という聖書的伝統のなかで、カントは自然を人間に従属させ、人間をほとんど世界を創造する神にも似た位置にまで高める。

カントにいわせると、人間は、外部から与えられる素材を自らの感性の先天的な形式たる時間と空間とにおいて受けとり、自発的な能力である自らの悟性の先天的な形式、カテゴリーによって規則づけ、かようにして秩序整然たる現象の世界、すなわち「自然」を構成して、それを普遍妥当的に認識する。そしてその際、素材を受容して能動的に規則づけ、現象を汎通的に統一し結合して「自然」を構成し、それを認識する人間の存在は不可欠である。この認識主観である不断に自己同一な人間のみが、「自然」に普遍的な必然的統一を与えて「自然」を「自然」たらしめる「自然」の人間学的秩序の原点であるから、その不在は「自然」の必然的統一をおよそ不可能にし、人間に従属する「自然」をそもそも成立せしめない。カントはこの自発性である認識主観、「自然」に秩序を布く恒常不変の人間を、先験的統覚とよぶ。「およそ必然性の根底には、つねに先験的条件がある。それゆえわれわれの一切の直観における多様なものの綜合にも、従ってまた客観一般の概念の綜合にも、さらにまた経験の一切の対象の綜合にも、意識を統一する先験的根拠がなくてはならない。……こうした根原的、先験的条件がすなわち先験的統覚なのである。……意識のこうした統一——すなわち、直観における一切の所与よりも前にあり、また対象の一切の表象がそれに関係してのみ可能となるところの統一がなければ、われわれのうちにはいかなる認識も生じ得ないし、また認識相互の結びつきも、認識の統一も不可能である。純粹で不変なこうした根原的意識を、私は先験的統覚と名づけたい。……統覚によるこうした先験的統一こそ、経験において共在しうる限りのすべての可能的現象からこうした一切の表象の結合を法則に従って作り出すところのものなのである。』³⁾ この統覚の先験的統一はまだ根原的な自発性を意味する。「あらゆる表象のうちで結合は、客観によって与えられ得るような表象ではなくて、主観自身によってのみ創られうる唯一の表象である、結合はじつに主観の自発性の作用だからである。』⁴⁾

この結合し統一する自発性の主観は、フリースのいうような経験的主観でもなければ、マールブルク学派の考えるように純粹に論理的に理解すべきものでもない。それは、純粹の自発性として、決して自己自身を認識

することのできない「自然」の外なる人間、しかし「自然」に秩序を与える人間である。もし認識されえたとすれば、それはもはや純粋な自発性ではなく、単に秩序を与えられた現象にすぎない⁹¹。それゆえこの純粋で不変な自発性である認識主観は、「自然」の秩序を創造する、「自然」の外なる、永遠の人間である。G. マルチンのいうように、認識されえないが思惟されうる、叡知的な、行為的主観と一つであるところの認識主観である⁹²。

おのずから存在する永続する世界の全体からでもなければ、天と地を人間のためにつくつた超世界的な創造神からでもなく、人間自身から出発して世界を理解しようとする近代の解放された人間の試みは、それが結局は世界の人間化を目指すものであるから、まず、世界秩序を人間学的秩序に再設計することから開始される。この新しい人間学的な世界秩序の再設計が成立し、それに従つて世界が人間学的に再建築されるとき、世界の人間化は完成して、世界は人間に従属する、人間の世界となる。

ところで、この新しい世界秩序の設計と世界の再建築との不可欠の前提は、世界から世界創造と世界秩序の原理を分離して、世界と世界創造者とを、それゆえまた世界創造者の唯一の似姿たる人間と世界とを、階層的に区別して秩序づけるキリスト教の神学的、人間学的世界秩序である。おのずから存在する一にして全なる自然的コスモス、その中で一切がたがいに従属し、たがいに調子を合わせており、したがって世界秩序である永遠のコスモスが世界であるなら、この「自存する恒常不変の世界秩序である世界」の秩序を再設計する道はない。キリスト教がはじめて、古代の知らなかった、世界と世界創造の原理との分離を構想し、世界秩序が世界創造者の設計にすぎないことを示して以来、世界は一つの設計となり、建築となって、創造原理の変換による世界の再設計と再建築の可能性が拓かれた。

自然的世界は、キリスト教的世界秩序のもとで、すでに自存する不滅のコスモスではなく、人格的な神の自由な意志にもとづく被造物であり、その秩序を設計者たる神の理性に負うていたが、近代に至って世界の創造者たる神が退場すると、代って人間が世界設計者の地位にのぼり、人間自身を原点とする機械的物質的な人間学的世界秩序を構想して世界の人間学的

再建築を企てるようになる。世界から創造の原理を分離して、創造する神と人間と自然とを階層的に区別する聖書的伝統の非神学的で徹底的に人間学的な一つの帰結が、カントの近代的世界建築である。

人間と自然とを階層的に区別するキリスト教の神学的人間学的世界秩序のもとでは、この区別にも拘らず、人間と自然との関係は、同一の被造物として創造の秩序と神の意志によって拘束され、まだ一定の限界内にとどまっていた。キリスト教的世界秩序が倒壊し、神が世界から退場するに及んで、非神学的に継承された人間と自然との聖書的区別は、一切の拘束と限界を失って、人間と自然とはとめどもなく分裂を深め、カントに至って人間は上昇して超世界的な世界秩序の創造者の座に達し、自然は下降して人間に従属する機械的、物質的な被造物に転落する。カントにおいては、人間学的世界秩序の絶対的始源として、「自然」に秩序を与える人間は、決して認識の対象となることのない純粹の自発性、自由な主観として、認識の対象たる「自然」の外にある。そしてこの、人間に従属し人間によって秩序を付与される「自然」は、いかなる自由をももたない単に因果決定性の支配する死せる物質の機械的に運動する「自然」、その機械的な法則によっては一茎の草の産出すら説明しえない灰色の生命なき「自然」にすぎない⁷⁾。

ところでしかし、人間は、自発的な認識主観であり行為的主観でもある自由な存在として、世界離反的な、「自然」の外なる「自然」の立法者であるとともに、また現象たる人間として、機械的な自然法則に支配される「自然」の内なる死せる物質である。じっさい、「現象界における人間のすべての行為は、その人の経験的性格と自然の秩序に従って共にはたらいっている他の諸々の自然原因とによつて規定されており、それゆえわれわれがその人の意志の一切の現象を徹底的に究明しうるとすれば、われわれはその人のどんな行為をも確実に予言できるだろうし、またその人の行為をその行為よりも前にある条件から生じた必然的な結果として認識できるだろう。従って経験的性格についてはいかなる自由もありえないのである。」⁸⁾

聖書的伝統の残光のなかで、自然を人間に従属させ人間化しようとする

カントの努力は、人間学的世界秩序の原理たる自由な人間を、世界離反的に「自然」の外へ投げ出し、一方では同一の人間を、現象として、「自然」の中へ投げ入れて、人間学的な「自然」秩序の機械的必然的な支配に服従させる。叡知界と感性界、可想界と現象界、自由と必然、実践と理論との分裂である。

しかし、純粋な自発性たる自由な人間が、人間学的世界秩序の創造原理として、世界から分離して超世界的であらざるをえないのは、すでにキリスト教以来原理的に必然的であって、むしろ問題は、近代の人間学的世界秩序の絶対的始源が神ではなしに人間であるということである。有限な人間はついに無限なる神ではなく、自由な人間が人間学的世界秩序の創造原理ではあっても、世界そのものの創造神ではなく、人間学的世界を建築するにあたって一切の素材を「自然」の外に仰がねばならないということから、この分裂は生じた。

カントは「純粋理性批判」の「先験的弁証論」において、こうした人間の有限性と、したがって人間による人間学的世界建築の有限性について語り、人間の認識はついに絶対的主体たる「心」、諸現象の絶対的全体たる「世界」、あらゆる実在の絶対的根源たる「神」には達しえない、という。すなわち、人間の建築した「自然」の中にはこれらのものはないのである。

とはいえ、そこに「神」があり、そこに永生する不滅の「心」と「自由」があると思われる、「自然」の外なる物自体の世界は、有限な人間の認識がついに到ることのない可想界であって、人間はただ自らの道徳的实践においてこの超感性的な世界をわずかに生起させることができるにすぎない。物自体の世界は、決して与えられてあるのではなく、人間自らの決断と実践とにおいて始めて生起する。

してみれば、人間は、分裂して一つの身を可想界と現象界とに引き裂かれながら、力をこめて実践し、この実践によって叡知界を生起させ、自己の自由を、それゆえ自己が人間学的世界秩序の創造者であることを確証しようとし、かようにして不斷に自己自身をただ自己自身によってのみ支えようとする終ることのない努力である。人間が決断と実践による自己の自

由の確証を怠れば、彼は、単なる死せる物質として、「自然」的世界の只中であって、自らの立法する機械的「自然」法則の必然性に拘束され支配されるほかはない。

しかし、カントが、自己の自由を確証し自己自身をただ自己自身によって支持しようとする努力のなかで、心をこめて追求し、力を傾けて呼び返そうとしたものは、すでに近代の世界からは見失われてしまった古いキリスト教的世界秩序ではなかったのか。カントは、道徳的実践のなかで確証される人間の自由を原点とし、それゆえ人間学的に、「神」と「不死」とを、もはや近代の数学的物理学的な人間学的世界秩序のもとでは決して経験され認識されることのない「神」の存在と「心の不死」とを、「自然」の外に要請する。さらにカントは、分裂した物自体と現象、自由と必然の統一を求めて、「判断力批判」において、すでに消え去った聖書的世界秩序の幻想を語る。

してみれば、自由な人間から出発して、もともと神を原点とするキリスト教的世界秩序を再建し、自ら進んでその秩序に服し、その秩序の中に安息の場所を持ちたいと希う、すでに原理的に不可能なこのカントの自己否定的な企ては、自己をただ自己自身によって支えようとする近代の自由な、偉大で不遜な人間の孤独と悲慘と卑小とを表明してはいないだろうか。自己をただ自己自身によって支えようとすることは、また自己がよりすぎるものもなく無辺際空虚の只中に投げ出されているということ、宇宙の中に自己の一定の地位と場所とをもはや持っていないということでもある。

すでにパスカルを襲った人間の近代的運命は、こうして例外なく、自然を人間化した近代の哲学者カントをも、彼が自然を人間化したことにおいて、襲っている。自然を人間化しうるためには、人間は「自然」に立法する人間学的「自然」秩序の自由な創造者として、自己自身を世界離反的に、自由のない「自然」の外へ投げ出さざるをえないのである。

注

- 1) vgl. Immanuel Kants Werke. herausgegeben von E. Cassirer. Band

I. Vorkritische Schriften. 1922. S. 231.

2) I. Kant ; Kritik der reinen Vernunft. A 125~7.

3) op. cit. A 106~8.

4) op. cit. B 130.

5) vgl, op. cit. B 157~9.

6) vgl. G. Martin ; Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie.
1951. § 28.

7) vgl. I. Kant ; Kritik der Urteilskraft. 338.

8) Kant ; K. d. r. V. B 577~8.